

い。欧米なみのレベルになるにはまだまだ、遠い道を乏しい予算と、少数の人とで歩かねばならない。ウ氏の著書を拝見してほんとにその感を深くする。けれども、これは、裏がえしていえば今日の日本の分類学を悲観するにはおよばないことで、なぜならば、まだまだ残された問題は欧米のそれよりずっと面白いことが多いといえるのではあるまいか。

氏の沖縄植物誌の180頁にはシカクダケ(シホウチク)に関するマ氏の短いノートがのっていて、この地域にはシカクダケが観賞用にまれに栽培されている。日本ではときに *Tetragonocalamus quadrangularis* (Fenzi) Nakai が用いられるが、その属名は不要名であって、属のタイプの *T. angulatus* (Munro) Nakai すなわち台湾の *Bambusa angulata* Munro はマ氏によればやはり *Bambusa* の一種にまちがいが無いものだという。この文献は現在、生憎手許にないのではあるが、シカクダケ属の原記載に用いられた中井

先生の花部の記述は「外人採取の標本によれば」とあるのみである。またこの竹には *Chimonobambusa quadrangularis* (Fenzi) Makino の名もあるが、この属のタイプはカンチクであるとされている。これは小さい竹で、その茎は丈が低く、平滑で断面が円く、竹の皮は膜質で、腐り易く、脱落しない。シカクダケではやはり竹の子が秋にでるが、竹の皮はやや厚くて早く脱落する中形の竹で、茎はその名のようににぶい四稜があって、表面は暗緑色、乾いてやや褐色をおび、ざらざらして光沢はない。節は長いいぼの様な突起が下に曲って環状にならんで、材はもろい。そして何にもまして、この竹はまだ花がでないことで、属の特質がよく表われる花序がでたならば、果して何に近いものになるかがわかってくるであろう。私は花の咲くのを楽しみながら待っている。

(国立科学博物館名誉館員)

日本産植物数種の学名考証

北 川 政 夫

M. Kitagawa: Some inquiries about the scientific names of the Japanese plants

近年の植物分類学方面の文献やフロラに順次目を通しての内に、植物学名の先行名や命名者の扱いについて、さまざまな改正が行なわれているのに気がついた。そこで、すでに承知されている方もあるかと思うが、一応日本に関係したものを選び、次に紹介して諸氏の参考に供したい。

1. ヒオウギ

ヒオウギ属はアヤメ科では特殊なもので、わずかに2種を含むのみである。ヒオウギの命名者はレマン Léman となっているが、これは誤りでドゥ・カンドル De Candolle が真の命名者であるという。

2. ヨシ(広義)

ヨシの学名は今まで *Phragmites communis* Trin. が用いられて来たが、1968年にクレイトン W.D. Clayton は "Taxon" 17巻2号で、オーストラリア産の *Arundo australis* Cavanilles (1799) がこれと全く同一種であることを認め、*Phragmites australis* (Cavanilles) Trin. ex Steudel を採用している。

3. ヒロハトンボソウ(チョウセンコトソウ)

この類の属名は *Tulotis* であるが、本種の基本名 *Orchis fuscescens* Linnaeus を *Tulotis* に移した場合、先行名の *Tulotis fuscescens* Rafinesque ex Jackson (1895) とかち合うので、原寛氏は *Tulotis asiatica* Hara と新名を用意した。しかし、ソ連邦の

クゼルニアスコフスカ Czerniaskowska はラフィネスクのつけた名は裸名であることを指摘し、*Tulotis fuscescens* (Linnaeus) Czerniaskowska と改名している。

4. クサコアカソ

中国の学者によれば、*Boehmeria paraspicata* Nakai つまりクサコアカソはチャールズ・ヘンリー・ライト C. H. Wright が1899年に発表した *Boehmeria gracilis* C. H. Wright と同じ種であるという。

5. ハマエンドウ

従来この種の学名は *Lathyrus maritimus* (Linnaeus) Bigelow (1824) とされているが、アメリカの学者によればビゲロウの与えた名は *Pisum maritimum* Linnaeus を引用せず、ハマエンドウとは別の種であるとしている。従って、これの正しい学名は *Lathyrus japonicus* Willdenow となる。

6. ヒロハクハラ

この種の命名者は単にエイトン Aiton となっているが、正しくは Solander in Aiton とすべきで、ソーランダーが本当の命名者となる。

7. アゼナ

本種の原種名 *Lindernia pyxidaria* Linnaeus (1771) は無効名となり、*Anagalloides procumbens* Krocke (1790) が有効名となっている。これを *Lindernia* に

移した最初の学者はボルバス Borbás (1881) であり、フィルコックス Philcox はこれを知らずに改名したものらしい。

8. エゾヒナノウスツボ

この種の最初の学名は *Scrophularia alata* A. Gray (1858-59) であるが、1781年にギリバート J. E. Gilibert がウクライナ産の植物に同名をつけているので、マクシモウィッチ C. J. Maximowicz は新たに *Scrophularia grayana* Maximowicz と命名した。ところが、ギリバートはすべての新種発表の際、現行の国際植物命名規約に則しない方法をとっているため無効名とされている。従って、はじめの学名が再び生きてくる。

以上をまとめると次の如くである。

- 1) *Belamcanda chinensis* (Linnaeus) De Candolle in Redouté, Liliac. 3: t. 121 (1805).
Ixia chinensis Linnaeus, Sp. Pl. 52 (1753).
- 2) *Phragmites australis* (Cavanilles) Trinius ex Steudel, Nomencl. Bot. ed. 2, 2: 324 (1841).
Arundo australis Cavanilles in Anal. Hist. Nat. (Madrid) 1: 100 (1799).
Phragmites communis Trinius, Fund. Agrost. 134 (1820).
- 3) *Tulotis fuscescens* (Linnaeus) Czerniaskowska in Add. & Corrig. ad "Fl. URSS" (t. I-XXX) 622 (1973), non Rafinesque ex Jackson (1895), nom. nud.
Orchis fuscescens Linnaeus, Sp. Pl. 943 (1753).
Tulotis asiatica Hara in Journ. Jap. Bot. 30: 72 (1955), pro nom. nov.
- 4) *Boehmeria gracilis* C. H. Wright in Journ.

Linn. Soc. Bot. 26: 485 (1899).

Boehmeria paraspicata Nakai, Rep. Veget. Mt. Apoi 17, 19 (1930), nom. nud.; Hara in Bot. Mag. Tokyo 48: 812 (1934), cum descr. brev.; Satake in Journ. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo sect. 3, 4-6: 483 fig. 9-10 (1936).

- 5) *Lathyrus japonicus* Willdenow, Sp. Pl. 727 (1802).

Pisum maritimum Linnaeus, Sp. Pl. 727 (1753).

Lathyrus maritimus (Linnaeus) Fries, Fl. Scand. 106 (1835), non Bigelow (1824).

Orobis japonicus (Willdenow) Alefeld in Bonplandia 9: 143 (1861).

Lathyrus japonicus Willdenow subsp. *maritimus* (Linnaeus) P. W. Ball in Fedde, Repert. 79: 1-2: 45 (1968).

- 6) *Sophora flavescens* Solander in Aiton, Hort. Kew. 2: 43 (1789).

- 7) *Lindernia procumbens* (Krocker) Borbás, Békésm. Fl. 80 (1881); Philcox in Taxon 14-1: 30 (1965).

Lindernia pyxidaria Linnaeus, Mant. Alt. 252 (1771), nom. illegit.

Anagalloides procumbens Krocker, Fl. Silen. 2-1: 398 t. 26 (1790).

- 8) *Scrophularia alata* A. Gray in Mem. Amer. Acad. n. s. 6: 401 (1858-59), non Gilibert (1781), nom. illegit.

Scrophularia grayana Maximowicz ex Komarov in Act. Hort. Petr. 25: 416 (1907).

(横浜国立大学名誉教授)

長野県から報告されたササ類

鈴木 貞 雄

S. Suzuki: Sasa group reported from Nagano Prefecture

長野県で発見され報告されたササ類は私がかぞえたところによると、21種2変種の多数にのぼる。それらが現在分類学的にどうなっているかということについては関心を持たれている方が少なくないと思われるので、以下それらについて申し述べたい。

1. ササ属 *Sasa* Makino et Shibata

1. オンタケザサ *S. megalogluma* Nakai 本種は1932年に中井猛之進博士が理科教育15巻72ページに裸名で発表され、その後1934年に植物研究雑誌10巻559

ページにラテン文をつけて正式に発表された。信濃国御岳(松村任三)とタイプ指定がなされた。私が東京大学にあるタイプ標本、御岳(松村: 1903, 8, 21)を研究したところによると、それはミヤコザサ節*のもので、稈軸に逆向の細毛があり、葉裏に軟毛がある

* ミヤコザサ節 sect. *Crassinodi* の特徴: 稈が低く、高さ1m以下で、枝を分岐しない。節間が長く、節は球状に膨出する。葉はうすく表面に光沢がない。表日本に分布する。